

# 葬送儀礼への第三者の関与

## 参入と介入の視点から

Involvement of Third Parties in Funeral Rites :  
A Study from the Viewpoint of Participation and Intervention

西村 明

NISHIMURA Akira

- ①ホケマキを求めて—葬儀への正統的周辺参加
- ②変化と介入の諸相—歴博資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』から
- ③輿型霊柩車の誕生—会館葬化の動きのなかの「参入」の局面

### 【論文要旨】

葬送儀礼では、故人をはじめ、遺族、地域住民、宗教者などが関わり、近年には医療関係者、葬儀業者、火葬場職員といった専門業者の関わりも増えている。本論文は、「高度経済成長とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究」という共同研究のテーマに対して、第三者の関わり方の諸相に焦点を当てることで、変化の質をとらえようとするものである。その際、新参者が習俗の知識を獲得し、伝統の担い手となるプロセスに「参入」する局面と、反対に第三者の関与が習俗のあり方に影響を及ぼし変化へと舵を切らせる要因となる「介入」の局面に注目することで、第三者の関与の度合いを測る指標とする。

ここで言う第三者とは、そうした従来の葬送習俗の担い手であった人々から見て外部者を指すが、そうした外部者は葬送儀礼の一部の機能を代替的に担うものとして関与する場合が多く、そうした関わりが葬送習俗に変容をもたらす場合もある際には、それを「介入」ととらえることで、持続と変化の様態の輪郭を描くことが本論文の基本的な問題設定となる。

まず「参入」に関するエピソードを取り上げた上で、歴博の『死・葬送・墓制資料集成』に基づいて、1960年代（広く昭和30～40年代前後も含まれる）から1990年代（あるいは平成初年代）にかけての変化と介入の諸相をとらえる。その上で、2000年代以降のさらなる変化をとらえるために、長崎県雲仙市における筆者の調査成果に基づいて、会館葬化の動きのなかの「輿型霊柩車」という新たな葬列の形を紹介する。そこには、葬儀業者の「介入」の局面が見られるばかりではなく、条件に応じて試みられる「参入」の局面もとらえられる事態について考察を行っている。

【キーワード】 葬送儀礼（葬儀）、第三者、関与、参入、介入

## ①……………ホケマキを求めて一葬儀への正統的周辺参加

2012年(平成24)3月に長崎県雲仙市国見町神代西里名で行った葬送儀礼(以下では基本的に「葬儀」と略することとする)の変化に関する聞き書き調査のなかで、話者の口から「ホケマキ」という聞きなれない民俗語彙が飛び出した。それは、しめやかさ、悲しみ、畏れ、穢れなどの意識や感情が全体を覆っていると考えられがちな葬儀の場がもつ、ある奥行きをとらえる鍵語の1つであろうと直感した。

中には(葬儀のしきたりについて)知らん人達も多いですからね、若い人達はですね。「あらー、そがんせんまんといかんとばいな(そういうふうにしなないといけないんですね)。どがんさすとかな(どういうふうにされるんですか)。」で、今度は自分たちでせにやいかんときのあつでしょ(自分たちで葬儀を行わなければいけない時があるでしょう)。

(Q: そういうふうに学んでいく場もある?)

そうです。そいでその亡くなった方への扱い方とか、そいから喪主とか、そういう家族の方々への接し方とか、言葉づかいというものを覚えていきよったんですよ。

中にはですね、「そういつまでも深刻になったらいかん」て言うて、「もう寿命が来て、思い出すことはなかるだ(ないだろう)」ということも。ある意味では、祝いまでないけど、そういう時には加勢人もいろいろ遊びがあるんですよ。

例えばですね、僕はこの家に住んで、班に入ったばっかいやった(班に入ったばかりだった)ですね。そういう人達(転入者)がよくやられることなんですよ。(話者は西里名に家を建てて神代の他集落から移り住んでいる。)

「あら、しもうた(しまった)。区長さん方からホケマキば借ってこんばつまらんよ(ホケマキを借りてこなければならぬ)」って言わりゅんぎな(言われたら)、「あつ、そいじゃ借ってきましょう」て言うて、行くわけですよ。「そがん言えば分かるけん(そういうふうに言えば分かるから)」て。

そしたら地理がまず分からんでしょうが。区長さん方がどこか分からんでしょうが。そん区長さん方ば(その区長さん方を)聞きながら行って、そしたらニターって笑わすですよ(笑われるんですよ)。区長さんが。区長さんの奥さんも「あらー、やられらしたのまい(やられましたね)」って。

そしたら架空の品物なんですよ。そういうのは無かわけ。「そぎゃんとは無かぎなとん(そういうものは無いそうじゃないか)」って言うて戻ってくれば、皆ドーッと笑うわけね。そういう一つの遊びですよ。

中にはね、後の人(後から越してきた人)、私の隣もそういう目に遭って、で区長さんのところに行ったら、「ありゃ、そりゃ前ん区長さんの所やろばい(それは前の区長さんのところでしょう)」ということになって、前ん区長さんば見つけちきて……。

このホケマキの別のバリエーションとして「インスイの水」というのもあると教えてもらったが、ここではこのホケマキに話を集中したい。島原半島北部にあるこの神代の地は、近世期には佐賀鍋島藩の飛び地であった。そこで、佐賀の自治体史を繰ってみたところ、次のような記述が認められた。

餅つきの時には、子ども達が邪魔であったのか、大人達に命ぜられ近隣にホケマクイ（ホケマクイは架空のもので、子どもに命じて借りにやらせるものの実体はない）を借りにやらせられた。<sup>(1)</sup>

葬儀と餅つきの違い、大人と子どもの違いはあるが、架空の品物を借りるために使いに走らせるというプロット（筋）は共通している。「ホケマキ」はこの「ホケマクイ」が音韻変化したものと推測できる。「ホケマキ」が葬儀の加勢人の話題に出るのは、故人がいわゆる「天寿を全う」した場合のことであり、この地域ではとりわけ百歳を超えた場合には、参列者に紅白の餅や饅頭が振舞われることがある。<sup>(2)</sup> そうした意味では、晴れがましい餅つきとの連続性がある話であり、遊びが許される余地があるのだろう。

もう少し具体的な記述を求めて文献を探していたところ、『朝日新聞』『声』欄に投稿された神奈川県在住の佐賀県出身者による「先人の知恵が『ホケマクイ』」と題した次のような説明に出会った。

昭和20年代後半、農家の我が家では、正月用の餅をついた。餅つきは早朝から夕方までかかる大行事。親類が集まり、土間で4人がかりで石臼でついた。子どもたちも手伝いをしたかったが、石臼の周りは4本の杵（きね）が振り下ろされ、極めて危険。そこで「ホケマクイ」の登場となる。

祖母が幼い私に言う。「隣に行ってホケマクイを借りてきて」。私は役立つことがうれしくて、いそいそと隣の家へ借りに行く。私の郷里・佐賀では、ホケとは湯気、ホケマクイとは湯気を絡め取る器具のこと。まだ見たことがない。「ホケマクイ貸して下さい」。おばさんが出てきて、「隣に貸したままになっている」。次の家に借りに行く。しかし次の家も同様だ。こうして私はホケマクイを求め近所を一巡する。

つまりホケマクイとは、餅つきの危険から子どもを守るために先人が考え出した幻の器具だった。子どもを餅つきから排除するのではなく、手伝っていると思わせる先人の知恵だった。もうすぐホケマクイの季節がやってくる。<sup>(3)</sup>

ここでは、やはり同様のプロットで、子どもを使い<sup>(4)</sup>に走らせている。この投稿の著者は餅つきにおける「ホケマクイ」を、子どもを危険から遠ざけつつ手伝いへの参加意識をもたせる先人の知恵として理解しているが、それでは、冒頭の葬儀における大人のからかい・悪ふざけについては、どのように理解すればよいだろうか。この場合、地元の若者や新規の転入者など、その土地の葬儀に不案内であるということが要点となるだろう。先に触れたように、葬儀の場は一般にしめやかさ、悲しみ、畏れ、穢れといった意識や心情を前提として、死者（遺体）や遺族を慮ったふるまいがしきたりとして強く作用している場であるため、地元の若者や転入者といったその地域では社会成員

としていまだ十分に一人前と見なされていない新参者は、葬儀への関与の機会を通して、しきたりや儀礼的知識を習得していく。言い換えれば、伝承のもつ状況の規定力が強い伝統的社会に「参入」するプロセスがそこに見られるわけである。レイヴとウェンガーは、そうした「新参者が共同体の社会的文化的共同体の十全の参加へと移行していく」プロセスを「正統的周辺参加」と呼んでいる<sup>(5)</sup>が、それを踏まえて言うならば、ホケマキとは、この場合、新参者から古参者へといたる階梯における知識の差を利用した遊びであると言えるだろう。

さらに言えば、葬儀の階梯のその先には、自分が送られる側に回るというプロセスも存在している。定型的な葬儀が繰り返される伝統的な社会では、参加者たちは葬儀の参列を通して、将来的に訪れる自らの死についても具体的なヴィジョンを獲得していく機会（あるいはイメージトレーニングの場とも言えようか）であったのではないかと推測もできる。いずれにせよ、そこでは、葬送習俗の持続力（求心力）は、新参者を周辺の参加者として知識習得のプロセスに「参入」させる安定性をもったものとして存在していると言えるだろう。

## ②……………変化と介入の諸相—歴博資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』から

一連の葬送儀礼を成り立たせているのは、亡くなった故人をはじめとして、故人をとりまく（地域によりその範囲は異なるが）遺族、地域住民、仏教僧などの宗教者が存在し、そして近年には医療関係者（病院で最期を迎える場合）、葬儀業者、火葬場職員といった専門業者の関わりも増えている。本論文は、「高度経済成長とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究」という共同研究のテーマに対して、第三者の関わり方の諸相に焦点を当てることで、変化の質を捉えようとするものである。その際、前章でみたように、新参者が習俗知識の獲得を通してその伝統の担い手としてのプロセスに「参入」していく局面と、それとは反対に第三者の関与が習俗のあり方に影響を及ぼし変化へと舵を切らせる要因となる「介入」の局面に注目することで、第三者の関与の度合いを測る指標として考えることができるだろう<sup>(6)</sup>。

第三者と言っても、故人との関係で言えば、身内・親族以外の地域住民もある意味では第三者と呼べる。しかし、多くの葬送習俗の中では、土葬における墓穴掘りや台所の賄いなどをはじめ地域住民の相互協力なくしては、ごく身近な家族のみで葬儀を出すことは困難であったという意味では、地域共同体成員も直・間接的な当事者の範囲に含まれる。むしろここで言う第三者とは、そうした従来の葬送習俗の担い手であった人々から見ると外部の者（場合によっては人ではなく外部要因）を指している。この後者の意味での第三者は、最初のホケマキの事例のように新たな成員としてその社会に「参入」し、葬送習俗の周辺の参加者として徐々に知識を習得して中心的担い手になっていくというプロセスを踏むわけではなく、葬送儀礼の一部の機能を代替的に担うものとして関与している場合が多い。そうした関わりが葬送習俗に変容をもたらす場合もある際には、それを「介入」ととらえることで、持続と変化の様態の輪郭を描けるはずであるというのが本論文の基本的な問題設定となる。

以下では、まず1997～98年度に行われた歴博の資料調査の成果である『死・葬送・墓制資料集成<sup>(7)</sup>』に基づいて、1960年代（広く昭和30～40年代前後も含まれる）から1990年代（あるいは平

成初年代)にかけての変化と介入の諸相をとらえておくことにしたい。<sup>(8)</sup>その上で、2000年代以降のさらなる変化の特質について、次章において筆者の調査成果に基づいて考察していくことにしたい。

まずは、葬儀の準備のプロセスを見ておきたい。具体的には a. 死亡通知, b. 葬具作り, c. 台所の賄い, d. 死装束縫い, e. 湯灌, f. 入棺についてである。

## a. 死亡通知

昭和期における死亡の知らせ(ツゲ・フレなど)については、中には遠方への知らせに自転車をを用いている例も認められるが(愛知県春日市・昭和31年、広島県広島市(旧安佐郡)・昭和30年、福岡県嘉穂郡・昭和39年)、多くの場合、寺・役場・近隣住民・遠方の親戚などに2人1組になって徒歩で回っていた。しかし、高度経済成長期以降の人口移動の激化などで、遠方に連絡する必要性は高まったはずであり、それを補うかのように電話が普及した。昭和40年に7.9%であった住宅電話世帯普及率は、昭和50年には6割を超え(62.8%)、この10年間に急速に広まっていることがこの数字に見て取れる。<sup>(9)</sup>

岡山県井原市では、昭和30年までは2人1組、昭和34、5年ごろは有線の使用が見られ、昭和40年代半ばから電話による通知となっており、上記の数字と対応している。北海道常呂郡でも昭和39年には班の各家に設置されたスピーカーで班長が一斉に放送していたものが、平成5年には電話で班長に知らせ、班長が班内に電話で知らせている。長野県長野市では昭和35年には遠方には電報が使われていたが、平成6年は施主が電話連絡をしている。遠方への電報は、福岡県嘉穂郡(昭和39年)、愛知県海部郡(昭和41年)にも見られる。

この地域では、本来は、施主がやっちはいけないとされ、本家やイトコなど肉親ではないが葬家のことをよく分かったものがツゲビトを行うものとされているようだが、東京都日野市(平成6年)、千葉県松戸市(平成6年)、埼玉県所沢市(平成10年)など平成に入って以降は喪主や喪家、同じ集落組織(区、組など)の人物、葬儀委員長となった人物による電話連絡が多く認められる。近隣であれば歩いて知らせる場合もあるが、すべてを電話で済ませる事例も多い。遠方への連絡手段として登場した電話が、死亡通知の習俗を変化させていることが認められる。

その他、新聞に死亡広告を掲載したり(和歌山県西牟婁郡・平成3年、宮城県牡鹿郡・平成9年、沖縄県島尻郡・平成9年)、役所への死亡届・火葬場の手続きは葬儀屋(農協)が行う(石川県七尾市・平成9年)などの特徴的な事例も見られる。

## b. 葬具作り

葬具作りについては、1960年代前後には親戚や集落の男性が関わるケースが多く、棺桶など一部を地域の大工に依頼したり、材料とともに葬具店などから買ってくるという場合もあった。他方で、富山県砺波市(昭和36年)、大阪府高槻市(昭和45年)、山口県長門市(昭和45年)、佐賀県唐津市(昭和48年)、岡山県井原市(昭和49年)、奈良県磯城市(昭和50年)、沖縄県島尻郡・昭和年代不明など、その頃から葬儀業者が関わる場合も見られる。

1990年代に入ると、半数以上の地域で葬儀業者(一部、市役所や農協など)の全面的な関与や、

---

タケキリなど一部分のみ集落の男性が行うといったように変化している。

### c. 台所の賄い

台所の賄いに関しても、1960年代には身内・親戚や集落の女性が担当するところがほとんどであるが、「イタノマ（板前）を頼んで盛りつけの料理は作ってもらい、天ぷらなどは隣組」（長野県松本市・昭和30年）、仕出し業者（岡山県井原市・昭和49年）などの外注がごく一部に見られる。

それ以降では、「すし屋や弁当屋からとるので、煮物や漬物、きんぴらごぼうなどを講中の女性で作る」（栃木県大田原市・平成9年）といった分担や、「通夜は葬式組の女性、葬式は仕出し」（熊本県下益城郡・平成8年）、「葬式当日の朝食と昼のオトキ料理はトリモチが作り、夜はトリモチとシンセキに振舞うので近在の仕出屋に頼んだ」（愛知県海部郡・平成9年）などのように機会によって使い分ける形で仕出しなどへの外注と賄い方の併用が見られるほか、「食事は仕出し屋の割り」（愛知県春日井市・昭和59年）、仕出し（弁当）（京都府亀岡市・平成7年）といったように、すべて外注する場合も出てきている。

### d. 死に装束縫い

死に装束縫いについては、1960年代前後の例では、ごく近い身内の女性が複数、または全員で縫ったり、集落内の閉経後の高齢女性などが担当する場合もある一方、葬儀業者（葬具店）や商店から購入する場合や死者の好んだ着物を着せた（長野県松本市・昭和30年）という事例も見られる。

1990年代になると、葬儀業者の装具一式にある既製品（紙製の場合も）を利用する事例が半数以上となり、中には病院で用意される事例（大阪府高槻市・平成6年など）も見られる。

### e. 湯灌

湯灌は、1960年代前後では故人に近い身内で行う場合がほとんどで、なかには班のなかで手慣れた人（大阪府高槻市・昭和45年）が関わる場合もある一方で、病院での死後のアルコール消毒の処置で済ませる場合（静岡県裾野市・昭和40年、奈良県磯城郡・昭和50年）もわずかに見られた。しかし1990年代以降では、病院と答える事例が15あったほか、「病院で湯灌、自宅では真似事程度」（群馬県吾妻郡・平成4年）、「死に立ち会った者の末期の水で湯灌の代わりとした」（神奈川県大和市・平成2年）などの簡略化した形式も認められる。葬儀業者が実施したもの（愛知県春日井市・昭和59年、兵庫県三木市・平成10年）も存在した。

### f. 入棺

入棺も湯灌と同様に、1960年代には故人に近い身内を中心に行われたが、70年代の事例で葬儀業者の関わりも見られる（奈良県磯城郡・昭和50年）。1980年代以降には、家族が立会い・手伝えるなかで葬儀業者が行う場合が増えている（愛知県春日井市・昭和59年、鳥取県八頭郡・平成8年、熊本県下益城郡・平成8年、石川県七尾市・平成9年、兵庫県三木市・平成10年）。また、病院側で入棺を実施したという事例もある（大阪府高槻市・平成6年）。

以上の葬儀の準備過程における変化と介入の諸相においては、死亡通知における電話の普及、葬具作り・死に装束作り・入棺における葬儀業者の介入、台所の賄いにおける仕出し業者等の介入、湯灌における病院の介入である。しかし、そうした介入は一気に進んだわけではなく、家族や近隣住民を担い手として行われていた状況との折衷的（過渡的）段階も見受けられる点については留意しておく必要がある。こうした過程の発生の要因をどこに求めるかについては、ここに表れたデータから読み解くことは容易ではない。したがって、それについては次章において少し具体的に検討してみることにしたい。

つづいて、葬儀における第三者の関与を見るために、g. 帳場、h. 司会進行、i. 弔辞、j. 弔電、k. 喪主等挨拶を取り上げ、それぞれの特徴を整理しておくことにしたい。

### g. 帳場

1990年代に入って認められる帳場の変化として特徴的と思われるものを挙げてみたい。

埼玉県所沢市の事例では、昭和28年には五人組で行っていたのが、平成10年には知人が行っている。熊本県下益城郡（平成8年）では、「以前は、受付の者が名前を書いていたが、現在は会葬者が自書」と変わっており、ほとんど近隣の参列者であったものが、多様な参列者の登場で名前の同定が困難になったのであろうと推測できる。また、帳場のあり方について、「一般と職場に分けた。遺族の職場の同僚2名が受付」（群馬県吾妻郡・平成4年）というのも見られ、職住一体の農業や自営業ではない、サラリーマン化による葬儀の変化であろう。この他、「帳面を葬儀社で準備」（高知県高岡郡・平成6年）というのは、葬具の準備等と同様、調査簿に記されていなくても他の地域でも見られたはずである。帳場の係として変わったところでは「ジルイ（地類）と銀行員」（神奈川県大和市・平成2年）という回答も見られた。一般的なものではないが、香典の金銭化に伴う変化として記しておきたい。

### h. 司会進行

従来の葬送習俗においては、司会を立てずに不文律によって進められているところも多かったようであるが、喪主や親戚、区長・葬儀委員長などの挨拶で葬儀を始めたり、司会者が開始を宣言するという場合もあった（和歌山県西牟婁郡・昭和33年）。葬儀業者が司会をするという事例は大阪府高槻市（昭和45年）しか見られなかった。しかし、1990年代以降の葬儀では、司会進行を立てる場合が増えており、葬儀場の職員・葬儀業者が多く（神奈川県大和市・平成2年ほか15道府県）、葬儀役員・（副）葬儀委員長（北海道苫前郡平成7年、和歌山県西牟婁郡・平成3年など7例）、孫（福井県三方郡・平成11年）、シンセキ（宮城県牡鹿郡平成8年）、同行（香川県大川郡・平成5年）などが見られる。新潟県上越市では、昭和40年には司会役をムラウチの親戚（分家）が務めたのが、平成5年の葬儀では農協が司会進行係を担当するようになっている。また愛知県海部郡では、「進行係はトリモチの中で話し上手な人」（昭和40年）であったのが、平成9年には葬具屋が司会をするようになっている（ただし、葬儀全般を葬具屋に一任することはごくまれな例で、司会はクミの人に任されることが多いという）。

司会進行役の存在は、葬儀が読経・焼香など宗教儀礼を中心とし、身内・親戚や近隣住民といっ

た相互に面識のある人々からなる不文律のしきたりに沿って執り行われるものであったものが、職場の同僚などそれ以外の属性を持った人々も参列し、式次第に沿って進めていく必要性を伴う公共儀礼の性格を持ち始めた事態として、ひとまず理解することが可能である。

司会進行の登場とともに興味深い変化として、マイクの設置が挙げられる（大阪府高槻市平成6年、福井県三方郡・平成11年、香川県三豊郡・平成11年）。山口県長門市の事例（平成7年）では、司会進行とマイクセット一式等は葬儀業者からのサービスとなっている（請求明細書による）。

## i. 弔辞

弔辞についても、1960年代前後の葬儀では存在しない場合も多かったが、地域の役職者・友人など（北海道苫前郡・昭和37年）、同じ大字の人（福島県白川郡・昭和33年）勤務先の海員学校の生徒（佐賀県唐津市・昭和48年）などが見られる。1990年代以降の事例では、友人代表（和歌山県西牟婁郡・平成3年）、老人会（福岡県嘉穂郡・平成3年、兵庫県三木市・平成10年）、仏教婦人会（広島県広島市（旧安佐郡）・平成2年）、傷痍軍人だったため傷痍軍人会から（長野県長野市・平成6年）、民生委員だったため市長と茶道人代表（佐賀県唐津市平成8年）、赤十字と町から（山形県東置賜郡・平成9年）、死者の教員時代の同僚（福島県相馬市・平成10年）など、故人のさまざまな社会的属性に応じて、弔辞を読む人々の属性も多様化している。また、宮城県牡鹿郡（平成8年）では、「近年始まった」ものとして孫が読む「お別れの言葉」が報告されている。

## j. 弔電

1960年代前後には、弔電の存在は多くない。最も早い事例は、福井県三方郡で昭和28年に不参加者より弔電2通が寄せられている。その他、長野県松本市（昭和30年）、富山県砺波市（昭和36年）、北海道苫前郡（昭和37年）、常呂郡（昭和39年）、静岡県裾野市（昭和40年）、愛媛県西宇和郡（昭和45年）、奈良県奈良市（昭和55年）に弔電披露が見られる。

青森県八戸市（平成元年）、三重県鳥羽市（平成2年）、群馬県吾妻郡（平成4年）、徳島県海部郡（平成4年）、北海道常呂郡（平成5年）、静岡県裾野市（平成5年）、長野県松本市（平成6年）、北海道苫前郡（平成7年）、愛媛県西宇和郡（平成8年）、佐賀県唐津市（平成8年）、奈良県奈良市（平成10年）、島根県能義郡（平成10年）、宮崎県西臼杵郡（平成10年）に弔電披露が見られるほか、福井県三方郡（平成11年）では、弔電、レタックスを司会が奉読、愛媛県周桑郡（平成6年）、高知県高岡郡（平成6年）、大阪府泉佐野市（平成11年）では葬儀社（農協葬祭部）の進行役によって弔電披露が行われたことが報告されている。こういった人々から寄せられたものであるかの詳細は不明であるが、昭和20年代の福井県の事例のように、遠方からの不参加者のほか、代議員など名士層から送られたものであろうと推測される。そこから、弔辞と同様、故人の社会的属性の多様化による第三者の関与とともに、故人の縁者で遠方に暮らすが故に参列が容易でない者の存在が想定される。

## k. 喪主等挨拶

喪主（あるいは親族代表や葬儀委員長）による挨拶は、故人が生前に受けた厚情や会葬に対する



お礼、故人の最期の様態の報告、遺族のこれからの厚情願いなどが述べられる機会となっており、1960年代前後の葬儀でも多く見られる。少し時代は下るが、奈良県磯城郡の昭和50年の事例では、葬儀社が挨拶を代行しており、その理由として「喪主や家族は取り乱しているため、堂々と挨拶などできるものではなく、すべきでもない。葬儀社や葬儀委員長に代行してもらうべきで、最近の喪主や家族の挨拶には違和感がある」とされている。

とは言え、「火葬になって告別式方式になってから喪主の挨拶が始まった」（香川県三豊郡・平成11年）といったように、1990年代の葬儀の段階で登場している場合も少なくない。

また、以前から挨拶が存在した地域でも、葬儀の形態の変化に応じて、挨拶の形や内容に変化も見られる。例えば、京都府亀岡市では、昭和37年では、「喪主は埋葬が終わると、山門のところで、会葬者ひとりひとりにお礼の意味で、だまっておじぎをする」形であったものが、平成7年の段階では、火葬化によって、「霊柩車が出る前に、喪主が挨拶をするようになった」という。福岡県嘉穂郡では、昭和39年の葬儀では、「頭を下げる程度」であったものが、平成3年には「甥が親族代表挨拶。出棺のときは別の甥が参列者に挨拶」と変化している。

島根県能義郡の平成10年の葬儀では、喪主の挨拶は、近年一般化したものとされ、「葬儀社の介入でマイクを持って挨拶するようになった」という。しかし、同時にそれまでに見られた「敷地入り口での礼」も継続して行われていることが指摘されている。

以上、帳場から喪主等の挨拶までの整理からうかがえることは、葬儀業者の関与の増大に止まらず、職住一体型の農業や自営業などから通勤を伴う賃金労働者などへの職業形態の変化や、通学・就職・転勤などによる親族・知人の遠方への移住といった故人をとりまく社会環境の変化に伴い、多様な属性をもつ参列者や関与者の登場が指摘しうるだろう。それが一つの要因となって、電報やマイクなどの技術革新を取り入れながら、司会や弔辞、挨拶など葬儀の進行形態にも変化を及ぼしているのだと言える。

### ③……………興型霊柩車の誕生—会館葬化の動きのなかの「参入」の局面

前章では、第三者の「介入」による葬儀の変化の具体的諸相を歴博の報告書をもとに概観した。それを踏まえつつ、2000年代以降の展開において、同様の「介入」と「変化」の過程があると言えるのかどうかという点について、一地域の事例に即しながら考察していきたい。

ここで取り上げるのは長崎県雲仙市内の旧瑞穂町と旧国見町の一部である。平成25年10月31日現在の旧瑞穂町人口は5,388人、神代地区の人口は3,158人（旧国見町人口10,763人）である。<sup>(10)</sup>平成22年度の国勢調査によれば、雲仙市全体の就業者割合は、第1次産業24.7%、第2次産業19.8%、第3次産業53.1%であり、第1次産業の全国平均が4.0%であることから分かるように、農漁業の就業者率が高く、なかでも農業者の割合が高い地域である。<sup>(11)</sup>

雲仙市瑞穂町伊福の島原半島広域農道（雲仙グリーンロード）沿いに、峯葬儀社まごころ会館がある。平成16年（2004）9月に設立されたもので、開館1年後には峯葬儀社が扱う葬儀の8割が会館葬となり、現在は9割9分に至るという。現在は島原半島の主要幹線としても機能している広域農道に接しているというアクセスのよさもさることながら、この会館の立地の特徴としてまず

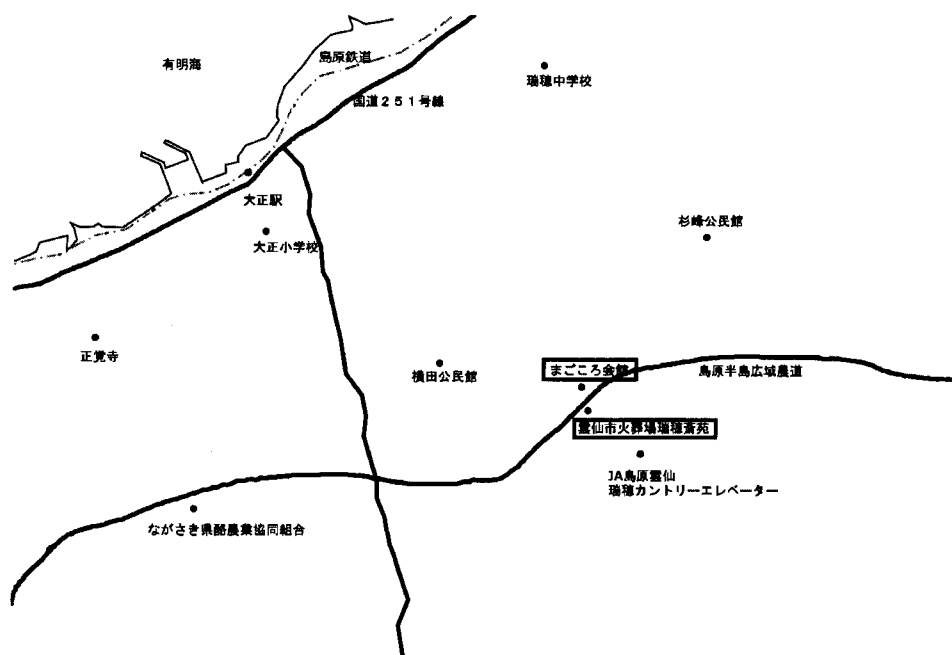


図1 まごころ会館と火葬場の立地

触れておかねばならない点は、広域農道を跨ぐ陸橋によって、雲仙市火葬場「瑞穂斎苑」と接しているということである。道の長さにして200m、会館から火葬場までドア・トゥ・ドアで言えば300mという至近距離である（図1）。この点が、この後の展開に大きく影響を与える地理的要素となる。

開館から3年目の平成18年のこと、国見町のとある高齢女性の通夜の席で「子供が7人おるとやけん（いるんだから）、明日は自分たちで担いで行こうで」という話が遺族のなかから上がった。しかし、翌日の出棺に際して試みるも持ち手があるわけでもない棺桶を担いで300mの道のりを行くのは困難で、結局遺族たちは断念して、通常の霊柩車を利用した。

その時、峯葬儀社を経営する峯澄晴氏は「何とか家族が一緒に行けるものを考えねば」と宮型霊柩車をもとに図案を作成した。その際、峯氏の手元に残る昭和28年の家族の葬列の写真も参考にしたという（図2）。また、会館から火葬場までは少し上り坂のため、担ぐ形ではなく、車を曳く形にした。そうやって、平成19年10月末に輿型霊柩車が完成した（図3・4）。

現状では9割以上の会館利用者が利用しているというが、当初は、「馬車」「リヤカー」「人力車」という表現で抵抗感を示す人々もいた。他方で都会暮らしの遺族のなかには、出棺時に霊柩車のクラクションの音がないと物足らないという感想をもつ人もいたという。

また、本論文冒頭のエピソードを持つ国見町神代西里名の葬式の際には、集落で所有する幡を持参しており、それを見た峯氏は、「ああ、これも揃えてあげんばいかんね（揃えてあげなければならないね）。うちでもそういうのに近づけてあげたい」と考えた。西里名は、近隣の集落のなかでもノベオクイ（野辺送り）のソーレ（葬列）の古い形を割合最近まで残しているところで、モトジャー



図 2 瑞穂町における昭和 28 年の葬列の写真

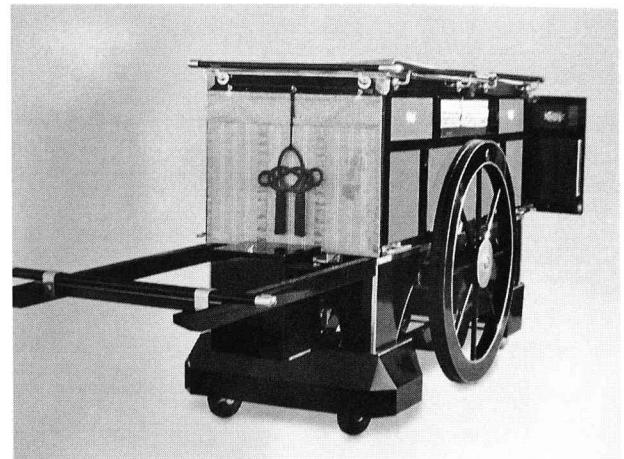
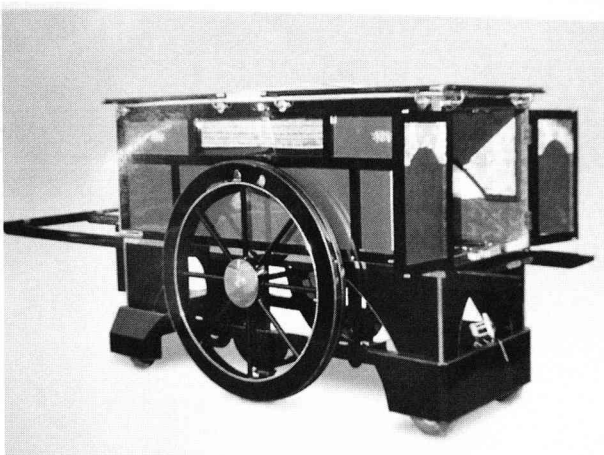


図 3・4 戦型霊柩車



図 5 神代西里名における葬列の様子



図 6 まごころ会館から火葬場までの葬列の様子

(もとだい：線香をハランの葉で包み半紙で巻いたもの)を持って香をたいて進む者を先頭に、「敬  
弔 西里名」と染め抜かれた幟が続き、その後ろにジャガシラ（龍頭）付き提灯、花籠、ヨウラク（環  
珞：垂れ飾り）、テンギヤー（天蓋）が続く。昭和30年代以前の土葬の頃は、遺骸を人力の霊柩車  
に乗せて進んだともされている。<sup>(13)</sup>平成16年以降に従来の形式で葬儀を出した家が少なくとも3軒  
確認されている<sup>(14)</sup>（図5）。また、これらの葬列道具は普段公民館に保管しているという。

まごころ会館では、輿型霊柩車が登場した翌年の平成20年には独自の幟も導入し、現在見られ  
る火葬場までの葬列の形が整えられた（図6）

ここで、2章の内容に照らしつつ、輿型霊柩車登場に至る峯氏の葬儀への関与について聞き書き  
をもとに整理しておくことにしたい。

峯澄晴氏は昭和25年生まれで、雲仙市瑞穂町西郷にある峯仏壇神具製作所の3代目である。先  
代までは仏壇職人であったが、鹿児島県の川辺仏壇などの流通によって地場産の仏壇が下火となり、  
昭和44年に熊本県水俣市で伯父が経営する峯葬儀社（仏壇と葬儀）で2年間見習いをし、昭和46  
年に帰郷後から仏壇販売に加えて、花輪（造化）・葬儀関係に着手した。

花輪については、昭和50年頃の葬儀では平均5～6本が上がり、それらは親戚、職場関係、同  
行関係から贈られたものであった。葬儀での司会もその頃から着手したが、当時は隣保班で司会・  
電報読みを分担していたものが、電報の読み間違いや焼香順を飛ばすなどもめ事があって、峯氏  
が代行することになったという。そのため店の方でマイクを揃えて対応している。また、葬儀に用  
いる祭壇については、30キロほど離れた諫早市近辺では、当時から祭壇が扱われていたそうだが、  
瑞穂町近辺では「何で仏壇があるのに、祭壇がいるのか」という反応であったという。しかし、葬  
儀のために帰省してくる遺族が祭壇を求め、さらに諫早側の隣町である吾妻町で祭壇が流行り出し  
たことが影響し、昭和50年代半ばから普及したという。

会館設立のきっかけについては、オジオバや独居の親の葬儀をする出郷者たちが「自分は加勢で  
きんとに（できないのに）隣保班の人に（加勢してもらうのは）気の毒っか（気の毒だ）」「夫婦二  
人加勢は気の毒っか」と地域の互助体制に負い目を感じた点と、外部から誘致して地元に着した  
企業などでは「隣保班の手伝い」という理由では理解を得にくく休みを取りづらいということがあ  
り、地元に残る人々の間にも会館の要請が高まった点の2つの事情があった。現在の会館の用地は  
荒地化したみかん畑であったが、平成3年に向かいの火葬場が広域行政事業で設立された後しばら  
くして、開館の4～5年前に所有者の親戚から会館としての活用の打診があったということである。

最後に、本論文の基本的な問題設定である「参入」と「介入」というキーワードに照らして、峯  
氏による一連の葬儀への関与（司会、祭壇、会館葬、輿型霊柩車の導入など）を考察しておきたい。  
これらの葬儀への関与は、葬儀業者による地縁・血縁の共同体が担ってきた死者儀礼機能の一部の  
外部化とひとまとめにして言うことも可能であるが、一つ一つのサービスの成り立ちに注目すると、  
共同体内部から出てくる要請と、外部から来る要請の2つが微妙に絡みながらそれぞれ違った経緯  
を持っていることがうかがえる。<sup>(15)</sup>

祭壇や会館葬の開始には、出郷者による要請が強く働いているが、後者については地元在住者の  
事情も関わっていた。ただし、その背景にまで迫ると外部からの誘致企業における就業形態の問題  
も潜んでいる。したがって、それは葬儀への間接的な介入としてとらえることができるだろう。司

会についても、一見共同体内のもめ事解消のための第三者的参入と見えるが、2章で見たように、司会を立てるということ自体の持つ公共的性格から言えば、すでに共同体の外部的要素を含みこんでいるものである。

それらに対して、輿型霊柩車の導入は若干異なる事情を持っている。そもそもの出発点は、火葬場まで棺桶を担ぎたいという地元民の思いであり、それに応えたいという峯氏の思いであった。それをきっかけとして過去の葬列の写真や西里名の葬列習俗への参入（回帰・廻行）を経て、自動車型の霊柩車とは異なる新たな葬列の形が生み出されたのである。これはもちろん全国的に見ても非常に稀有な条件下で起こった出来事ではある。すなわち、火葬場と葬祭場の地理的条件と地域的要請、火葬場の広域行政事業化と広域農道による交通アクセスの利便性、葬列習俗の残存と会館葬化の動きとの重なりなどである。それに峯氏が地元の企業として葬送のあり方を模索していたという点も大きく、そこから「介入」的改変ではなく、それまでの習俗への「参入」が試みられたわけである。

しかし、この輿型霊柩車に伴う新たな葬列は、西里名の葬列の形態を完全に取り入れているわけでもなく、また他集落からすれば、一集落の形態を一般化（あるいは流用）して提供していると思われる可能性がないとは言いきれない。そうした面では、やはり既存の葬儀のあり方（とは言ってもそれはすでに変化を経た形態であるものだが）に対する「介入」であるということになる。ただし、会館利用者の9割以上が輿型霊柩車を利用している現状を、単なる物珍しさからや商業化に乗った事態としてとらえることにはためらいを覚える。いずれにせよ、高度経済成長以降のこの数十年の葬儀の変化は一方向的な流ればかりではなく、「介入」による大きな変化にさらされつつも、微細な部分で習俗の維持や回帰にむけた「参入」の試みがあることに目を向ける必要があることに注意をうながす事例であると言えるだろう。

## 註

(1)——川副町誌編纂委員会編『川副町誌』川副町誌編纂事務局、1979、753頁。

(2)——同じ町内の他集落にいた筆者の祖母も103歳まで生き、その葬儀の際には紅白の饅頭が用意された。

(3)——飛石靖（無職、神奈川県寒川町、61歳）の投稿（『朝日新聞』2005年12月17日付朝刊）。

(4)——佐賀県出身の詩人仁科理（1939-）の詩にも「ほけまくい」と題するものがあり（『木偶』53号、木偶の会、2003年）、同様に年末の餅つきの際に、子どもを使い走らせる様子を描写している。なお、仁科の詩的解釈では、「ホケ・マクイ」は「湯気・払い」というより「阿呆・廻る（呆け・捲りということか——引用者註）」であろうととらえている。

師走三十日、餅搗きが始めると、子供たちは、親から〈ほけまくい〉を近所から借りてくるように、言い付けられる。寒風のなかを、子供たちは走って

いく。隣家に行けば、昨夜隣に貸したから、そこで借りろと言われ、その家にいけば、また、隣に貸してあるからと言われ、だんだん家から遠くなる。あげくの果てには、講中すべての家々をまわる破目になる。〈ほけまくい〉を借りられないまま、疲れ果てて家にもどると、何と餅搗きはすっかり終わっているのだった。

「ホケマクイのことなど  
誰も教えてくれないから  
ホケとは 湯気（ほけ）で  
マクイは 払うで  
餅搗きの湯気を追い払う  
団扇  
と信じていた

ところがどうだ

過ぎていく歳月のなかで  
ホケとは 阿呆  
マクイは 廻る  
解ったのはそれだけじゃない  
いったん借りに出かけたら  
死ぬまで離れぬ疫病神のように  
歩きまわらなければならぬ  
厄介者  
ホケマクイ  
(後略)

(5)——ジーン・レイヴ&エティエンヌ・ウェンガー(佐伯胖訳)『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書、1993年、1頁。

(6)——「参入」と「介入」というこの指標は、外部者によるある地域伝統への関与を捉えるために筆者が独自に設定した指標であるが、いくつかの先行研究の議論がベースにあり、無から創造された概念ではない。R・レッドフィールドの農民社会における大伝統と小伝統や、シンクレティズムをめぐる古典的な人類学・宗教学説がすぐに想起されようが、より直接的には関一敏がマテオ・リッチの中国伝道をめぐって展開した比較宗教学的考察を踏まえている。

マテオ・リッチの18年間という気の遠くなる布石の時間は、ならばどのような意味をもちうるのだろうか。遠回りの方法は、なみの人類学者には想像のつかない中国文化への参入を実現した。言葉を習得し、慣習を尊び、古典を知り、さてその知見を宗教活動へと転換しようとして強い拒否と反撥にぶつかったことは、はなからの宣教と同じ失敗を意味するだろうか。そうではないと思える。異教の伝道がもたらすものは、(中略)宗教を軸とする広い意味での文化=社会資源の配置換えと云えばよい。その異教が歴史的にはキリスト教である場合に、キリスト教化することもしくはその勢力との交渉は「より広い変容の一部」たらざるをえない。van der Veerはその「より広い変容」に「conversion to modernities」の名を与えた[van der Veer 1996]。(中略)「近代への改宗」こそが、宣教師たちがそれと知らずに遂行しようとした歴史的実験なのだ。そのときにかねらの突き当たったカベ状のものが、第一に「神の訳語」をはじめとする言語であり、第二に「典礼」にかかわる慣習であることをマテオ・リッチの宣教体験は身をもって示した。(中略)なぜつまづきかと言えば、翻訳不能な慣習こそがモダニティにもっとも抗い、翻訳可能な経済原則(ポリ

ティカル・エコノミー)に対抗する生活世界の翻訳不能なエコノミー(モラル・エコノミー)を以て近代の一元性を複数化するバネとなったからである。(中略)

マテオ・リッチの足跡はこうした言語の習熟と現地の慣習への配慮をとおして、ふつうの宣教師には突き当たることのできないクリティカルな(この場合は臨界的な)「近代への改宗」の主題群を示している。(関一敏「二分法の効用と限界—「内と外」表象をほぐすための比較宗教学的レッスン」関一敏・西村明編『内と外—共生社会学論叢Ⅰ—』九州大学大学院人間環境学府共生社会学講座・文学部比較宗教学研究室、2003年、2～3頁)。

ただし、ここでの宣教師マテオ・リッチの参入から改宗(介入)への転換という宗教学的主題を、(ことは「近代への改宗」という共通性があるとはいえ)本論文における葬送習俗の変化にそのまま当てはめるわけにはいかないだろう。習俗の変化をもたらす第三者は、必ずしも宣教師のように時に強い使命感を持って意識的に変容を迫るドグマ的なアクターではない。ここでは、そうした能動性や意図性に関わらず、変化へと舵きり役を担う第三者の様態に注目することにしたい。

(7)——国立歴史民俗博物館編『死・葬送・墓制資料集成』東日本編1・2(1999年)、西日本編1・2(2000年)、国立歴史民俗博物館。

(8)——山田慎也が指摘するように、葬儀あり方の変化をとらえるためには地域ごとの多様な近代化過程をインテンシブに調査する必要がある。山田慎也『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』東京大学出版会、2007年、27頁。

本章で行う作業は、先述の「参入」の全国的な傾向をエクステンシブに把握し、次章における筆者の調査事例を位置づけるための見取り図を得ることを第一義とするものである。それぞれの地域ごとの状況に照らして変化の様態を意義づける作業については、今後の課題とした。

(9)——「第1-2-21図 住宅用電話加入数及び住宅電話世帯普及率の推移」『昭和54年版通信白書』総務省、79頁。

(10)——雲仙市ホームページ「自治会別人口」より集計。  
([http://www.city.unzen.nagasaki.jp/info/prev.asp?fol\\_id=7174](http://www.city.unzen.nagasaki.jp/info/prev.asp?fol_id=7174))

(11)——島原半島全体が長崎県を代表する農業地帯であり、地図上の形から「一億人のいぶくろ」とも称されている。

---

(12)——先述の雲仙市ホームページ「自治会別人口」によれば、西里名の世帯数・人口は155世帯413人である(平成25年10月31日現在)。

(13)——歴博の報告書でも、山梨県富士吉田市や福井県三方郡においてリアカーが活用されていたことがうかがえる。後者では、リアカーの普及後にいったん棺桶を背負うまねをしてから乗せたと言われている。

(14)——西里名の葬儀の話については、立石信昭氏と区長の山中凱和氏に伺った。写真は山中氏の提供である。またホケマキの話も山中氏より伺った。

(15)——山田慎也に倣って言えば、死の変換法の外在化ということになり、葬儀業者(葬祭業者)はそのエージェント(代理・代行する存在)ということになる。山田前掲, 318～323頁。

(東京大学大学院人文社会系研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2013年12月21日受付, 2014年5月26日審査終了)

## **Involvement of Third Parties in Funeral Rites : A Study from the Viewpoint of Participation and Intervention**

NISHIMURA Akira

Funeral rites involve a variety of people including not only the deceased and the bereaved but also local residents and religious professionals. Recently, more and more specialists, such as medical professionals, funeral directors, and cremators, are also engaged in funeral services. In this context, this paper aims to reveal the characteristics of changes. To this end, the changes in the approach of third parties to funeral services are examined in relation to the subject of the collaborative research on “The Changes of Custom of the Funeral and Grave Systems before, during and after the Rapid Economic Growth Period.” More specifically, in order to assess the degree of involvement of third parties, attention is focused on two aspects: the “participation” of newcomers in the process as a bearer of tradition by acquiring knowledge of the manners and customs; and the “intervention” of third parties that produces impacts and causes changes to the manners and customs.

The word “third party” in this article means an outsider to those who were responsible for funeral customs for years. These outsiders often join the process of funeral rites by acting as a substitute for some functions. Considering their involvement that causes changes in funeral customs as “intervention,” this paper discusses its basic theme: trends in the preservation and change of funeral customs.

First, this paper presents an example of “participation” and examines the trends in changes and interventions from the 1960s (or the late 1950s) to the 1990s based on “Collection of Materials on the Death, Funeral Rites, and Grave Systems” by the National Museum of Japanese History. Then, in order to clarify new changes after the 2000s, the results of our research in Unzen City, Nagasaki Prefecture, is referred to as an example that illustrates a new form of funeral procession to use a bier-type hearse introduced as more and more funerals are held at funeral halls. This paper provides some considerations on this phenomenon since it reflects not only the “intervention” of funeral directors but also their “participation” according to the conditions.

Key words: funeral rite (funeral service), third party, involvement, participation, intervention

---